—広　告—

KIT
キャンパス
レポート315

文・杉村裕之

当たり前をロボットで実現
初の女性リーダー、夢は優勝

山村雪季（やまむら みずき）
金沢工業大学
工学部
ロボティクス学科四年
群馬県立沼田高等学校出身

加速する少子高齢化で、日本の人口減少に歯止めがかからない。その数は、一年で実に約九十万人。結果、経済や産業の活力が大きく削がれ、そのしわ寄せは社会的弱者ほど強く被る。

「高校時代、障がい者の自立と社会進出を支援する分身ロボットの存在を本で知り、ぜひロボティクス学科のある大学に行きたいとKITを選びました」

入学前から興味津々だった課外活動の夢考房ロボットプロジェクト「Team_Robocon」にも早々に加わった。機構班でロボットの設計や加工、組み立てを担当し、三年次はNHK学生ロボコンに出場するメンバーのサポート役として、テストランのデータをリアルタイムで会場に知らせた。

「今年こそ優勝！」と大きな期待をかけていただけに、想定外の予選敗退に無念の二文字しかなかった。そんな中、次年度の大会に向けた新体制づくりが始動した。新リーダーは二年次以下の推薦を元に決めるのが慣例で、山村さんは「Team_Robocon」と動物型ロボットに取り組む「Team_RID」で構成されるロボットプロジェクトで、初めて女性の統括リーダーとなった。

「大会メンバーを経験していないので驚きました。人やチームを動かすマネジメント力が評価されたと聞かされ、それならやるしかないと決心しました」

取材の翌々日に夢考房プロジェクトの発表会が迫っていた。その準備に加えて、今年の学生ロボコン出場がかかるビデオ審査の資料作成、大会用ロボットの製作、研究に就活と、多忙の極みの中に彼女はいた。だが、動じる風はなかった。「To-Doリストやアラームで抜けや漏れがないか欠かさずチェックしています。毎日が充実して楽しいですよ」。

これだから統括リーダーが堂々、務まるのだと思った。今年の目標は、二〇一三年以来遠ざかっている学生ロボコンでの優勝。日本一を確実に引き寄せるため、プロジェクトに渉外担当を新設し、技術力向上などで企業との関係性の強化にも心を砕く。

考える研究テーマが、いかにも彼女らしい。精神障がい者を温かく見守り支援するロボットの開発である。「日常生活での当たり前がそうでない厳しい現実があります。それをロボットで補い、当たり前を叶えてあげたい」。マンパワー不足が深刻な福祉分野で、質の高いサービスを提供しようと挑む山村さんのロボットの完成が待たれる。

金沢工業大学
石川県野々市市扇が丘七-一
電話番号（〇七六）二四八-二〇〇